

令和4年度 第1回ねりま防災カレッジ事業運営会議 会議録

開催日時：令和4年11月4日（金）14：00から15：30

出席者：13名（2名欠席）

1 開会

2 報告事項

- (1) ねりま防災カレッジ事業の概要説明（資料3）
- (2) 令和4年度ねりま防災カレッジ講座等概要説明（資料4）
- (3) 令和2～4年度ねりま防災カレッジ事業実績について（資料5）
- (4) 令和4年度ねりま防災カレッジ事業予定について（資料6）
- (5) その他

質疑応答

〈委員〉昨年度から実施の発災体験ツアーとは、どのようなものだったか。

〈事務局〉発災から24時間を時系列に整理して、まず自分の身を守る場所から、家族の安否確認、避難する際の注意点、最後は避難拠点にある資機材の紹介や避難スペースについて、防災学習センターの展示室を活用して説明をするものである。発災体験というところで、VR起震車や室内VRを完備している。

〈委員〉発災体験ツアーの人数は、資料5のねりま防災カレッジ年間受講者数の中には入っていないのか？

〈事務局〉人数自体は集計しているが、カレッジの年間受講者にはカウントしていない。

〈委員〉カレッジの年間受講者の人数として位置付けてよいのでは。新たな取り組みとして様々紹介できると思う。今年は何人ぐらい参加したのか。

〈事務局〉今年度は10月までに43団体251人が参加している。

〈委員〉枠外でもよいので、実績として入れておいた方がよいと思う。

3 議題案

・オンラインについて

(1) 今年度上半期の成果とメリット・デメリット

〈事務局〉今年度から、オンラインによる受講方式を試行的に導入した。事務局として、最大の成果は受講者増につながったことである。他には、コロナの感染リスクがないという点がある。また、自助講座の夜間コースの方から帰宅してからも受講でき、大変喜んでいただいた。デメリットは、機械の具合が悪いと受講に影響があること。この点は改善しているが、上半期では音声に不具合がでた講座があった。講師からは、オンライン受講者の顔が見えないため反応が分かりづらいという意見があった。また、オンラインの場合はQRコードからアンケート回答いただくが、会場と比べて回答が少ないことがあった。

〈委員長〉何か委員の皆様からご意見やご質問等をいただければと思う。

〈委員〉オンライン受講の申込みは事前申込みか？

〈事務局〉事前申込みである。

〈委員〉事前申込みの際に、顔出し原則ということをお伝えしたうえで講習会を実施したことがある。また、厳しくするのであれば、申込み時の名前とオンライン受講時の名前を同じにしておくことを原則とし、待機室用のチャットを使い、名前を変更しなければ入室できないようにする方法もある。

〈委員〉オンラインを今後も続けていくのであれば、音声の不具合等は設備を整えていけば問題はない。一方、会場と同時並行で実施するオンラインとは別に、オンデマンドという形態がある。オンデマンドは自由なときに勉強できるという利点があるので、今後そちらの環境も整えていけるとよい。オンライン、対面ともに良さがあるので、特性を考えて講座を実施すれば効果が上がる。

〈委員〉これまでは、感染拡大防止の観点から、オンラインを推進してきたが、同時に、オンラインのメリットを知ることとなった。コロナがいずれ収束した際には、オンラインを続けるか、対面に戻すのかという議論が起こると思う。

〈委員長〉大学の場合はどのようにされているのか。

〈委員〉大学は基本、授業を対面形式に戻している。

〈委員〉戻しているが、自分の大学は朝1限目と17時半以降はオンデマンドで実施している。そのほかの時間帯は、対面形式を主として、オンライン形式も併用している。

〈委員長〉通学時間帯に学生を集中させないという観点から実施しているのか。

〈委員〉感染のことを考えると、通勤ラッシュを避け、オンデマンド授業は自由にできる時間帯で行っている。オンラインのよさはあるが、顔が見えない等の不具合もある。対面形式が主ではあるが、それぞれの良さを活かして授業を行っている。

〈委員長〉デメリットとして、匿名性の問題、機械の不具合があること、対面で行うもの、オンデマンドで行うものについてのご意見を頂戴した。次に、オンライン受講を推進する講座についてのご意見を伺う。

(2) オンライン受講を推進する講座

(3) 今後の実技のあり方

〈事務局〉オンライン講座には、実技やグループワークができないというデメリットがある。自助講座は人材育成を目的としているので、実技やグループワークができないのは目的を達成するうえで不具合がある。一方で、これまで乳幼児の保護者向け防災講習会で当日お子さんの体調不良でやむを得ず欠席となることがあったが、今回は自宅で視聴できるので好評をいただいている。会場受講の方は当日のキャンセルが多く、実は2組しか会場に来なかったという講座もあった。こうした状況も踏まえて、講座によってオンラインは有効だと感じた。実技やグループワークが伴うものはあまりオンラインに向かないが、講義と実技を切り離して講座を実施するという選択肢もある。委員の皆様のご意見を頂きたい。

〈委員〉可能な限りオンラインでも実技を行うという前提で考えるなら、グループディスカッションであれば、オンライン上でグループ分けをして、その中で話し合ってもらおうという形で実施することは可能である。ただ、グループワークのように集まって作業をすることはできないので、実技は動画等で補完する形となる。

〈委員〉今年度の自助講座では、最後に簡易トイレの取り扱い方について実演があった。会場にいる方には匂いや色合いがよく分かったが、オンライン受講の方は分かりにくい体験だと感じた。会場とオンラインで同じ体験をするのは難しい。自分の組織には防災スタッフが80名程いるが、それぞれ都合もあり、集まって1つのイベントに出席するのは難しい。イベントや避難拠点の活動等を、オンライン上で参加を可能にすれば、若い方にも参加してもらえる。

〈事務局〉自助講座では簡易トイレの実演を、コーヒート凝固剤を使って行った。他にも、オンライン受講の方に、事前に三角巾を送付し、カメラで映しながら会場の人と一緒に実技を行うといった工夫をした。ただ消火器の訓練等はそういった工夫も難しい。

〈委員〉座学はオンラインでも学べるが、集まって顔の見える訓練等が一番、災害時に必要な関係性

やつながりが育まれる。オンラインと会場のどちらにもメリットがある。オンデマンド講座は自分のペースで学習でき、現場で実技を行うなど、目的に応じて選べるのがよい。また、拠点活動において、若い人に興味を持ってもらうツールとしてオンラインは効果がある。自分の拠点では、商店街や法人関係の方に声をかけても、時間がなく参加ができないことが多い。そこで、自分が行う講座や訓練等を、YouTubeで発信したところ、興味をもって参加されるケースもあった。参加したいという意欲を形にするという意味でも、オンラインやオンデマンドは効果を出すと思われる。

〈委員〉防災委員会のメンバーで、オンライン講座を受講した。自宅で視聴も可能であったが、全員が集会所に集まって視聴した。申込が1人でも、グループで受講しているという実態もある。実技は難しいが、ディスカッションはできる。

〈委員〉オンラインを実施しても、自宅で個々が学習するのではなく、集まりたい、お話をしたいということがあがると思う。

〈委員長〉オンラインを敬遠する方は、機械が分からない、パソコンやスマホを持っていないではなく、顔を合わせてお話をしたい、集まりたいという理由があると受け止めた。一方、オンデマンドやオンラインは、会場に足を運べない方、特に現役世代や若い方への啓発となり、オンラインでの参加から、現場につながる可能性もあると感じた。

〈委員〉応急救護の講習をオンラインで実施している事例がある。心肺蘇生法であれば、ペットボトル等、代替品で実施できる。オンラインでも実施できない講座等は防災学習センターに来所してもらうのが良いのではないかな。

・講座のテーマ等について

(1) 企画展

〈事務局〉企画展は、年1回、テーマに沿った展示の見学や防災体験のために実施している。今年度は「もしねりまで災害が起きたらどうなる」をテーマとし、防災学習センターと体育館を使って避難拠点や避難生活の様子、生活再建についてパネル展示、地震や浸水について、起震車等を使った疑似体験するコーナーを設けた。また、コーナーを回りながら謎解きを実施し、終わったらプレゼントを渡す企画も実施した。防災学習センターの施設を啓発する目的から多くの人に来ていただきたい。そのためのテーマおよび内容についてお知恵を拝借したい。

〈委員〉来年は関東大震災からちょうど100年になる。改めて関東大震災を子どもたちに語り継ぐために特別企画展の実施はいかがか。関東大震災から50年のときに発行された体験記に、生々しい話が数多く載っており、中でも“流言飛語”が大きな問題となったのが分かる。今であればSNS等、現代にも通ずるような話も出て来る。

〈委員長〉テーマについてのご意見をいただきました。そのほか、たとえば警察や消防における広報活動について何か考えがあるか。

〈委員〉警察も広報には苦勞している。特殊詐欺の啓発も行っているが、被害を抑えられていないという課題がある。区にはVR起震車があり、これを活用して防災学習センターを宣伝するのはいかがか。

〈委員〉消防には車両という武器がある。これを活用し消防署を一般開放した時には、コロナ渦前で1000人規模の人が集まった。また、ある出張所のオープン記念に、特撮ヒーローに1日消防署長をやっていたときも、実施した小学校に1000人弱の人が集まった。区で所有するコンテンツを、防災に結び付けて宣伝するのはどうか。

(2) 女性防災リーダー育成講座

〈事務局〉今年度は「災害時における女性視点の大切さ」というテーマで、被災地支援の経験のある講師をお招きした。こういった視点でのアドバイスを頂きたい。

〈委員〉女性だけでなく、各講座に共通して言えるのは、勉強したことを活かす場がない。避難拠点に行っても、受け入れ側もどう対応して良いかわからないことがある。たとえば、受講者をリストアップし、オンライン上でのやり取りでもよいので、集まって何かをする、発信する場を作る等がないと防災意識や防災に対する活動の意欲が続かなくなってしまう。

〈委員〉たとえば、どの地域に受講生が居住しているか共有できたら、お声がけしやすくなるので避難拠点にとってはありがたい。

〈協働推進課長〉

つながるカレッジねりまの防災分野は、女性の方が多く、地域とマッチングしているので、活躍されている方に登壇していただき、実践例を話してもらうのもよい。

〈事務局〉つながるカレッジねりま防災分野共有コースは、講座の修了生を町会の事情を確認しながら地域につなげている。昨年度は、女性防災リーダー育成講座の修了生の中に、組織で活動したいという方がいて、地元防災会の会長を通じて加入した例があった。地域の事情から、上手くいかないところもあるが、修了生を地域につなげていきたい。

〈委員〉女子会カフェで、昨年度の女性防災リーダー育成講座の内容について、下着やナプキンの備蓄等の話を共有した。そういう話は、女性だけを集めると話しやすいと感じる。

〈委員〉小学校4年生向けに、地域危険度の資料を使って、地域防災の授業を行った。児童も先生も大変真剣に聞いていただいた。子供の頃から防災教育をはじめれば効果的だと思う。自分の住ん

でいる地域を見直すきっかけを作ることができる、また、地域の見直しを親子で考えるきっかけになると思う。

<委員>区外でも、女性リーダー講座を実施している。女性以外にも男性や障害のある方等、様々な立場の方がいるので、事業は女性で始めたものの、今は“多様な”というテーマに移行している。女性というタイトルだと、男性が参加し辛くなるかもしれないが、男性も聞かなくてはならない話だと思う。

<委員長>ご意見を聞いて、学びの内容や目的、方向性をしっかり決めていれば、テーマに関わらず興味を持っていただけると受け止めた。

(3) 講座の周知方法

<事務局>講座の周知は、区報・各区立施設でのチラシ配布・町会自治会でのチラシ回覧（自助講座）、ねりますくすくアプリ（子育て世代向け講座）や公式LINE・Twitter、学校でのチラシ配布（小学生・中学生向け講座）等を行っているが、新規の受講生が伸び悩んでいる。皆様からアドバイスがあればいただきたい。

<委員>時限的だが、ワクチンの集団接種会場にチラシを置くのはどうか。図書館も高齢者利用が増えており、最近は繁盛しているのでよいと思う。

<委員>自分の避難拠点では、薬剤師や商店街の方たちに訓練を体験してもらった上で、お店でチラシを置くなどの周知に協力いただいたことで、参加者が増えている。ねりま防災カレッジでも同様の周知方法はいかがか。

<委員>子どもが関わると親は真剣になるので、乳幼児の保護者向けには、産婦人科等にチラシを置いたり、小学生・中学生向け講座の際に自助講座のチラシをご家庭に持って帰っていただくという形もよいのではないか。

<委員>消防では、官公庁はチラシを無条件で置いてもらうことに加え、消防署の見学であれば地域の小学校や保育園に周知する等、ターゲットをコントロールしてイベントを開催している。

<委員>喫茶店等、お店にポスターやチラシを置いていただくのはどうか。ノベルティを合わせて配付、チラシのデザインをプロに作成を依頼するなど、手に取ってもらえる工夫も必要である。

<委員長>本日は皆様から有益なご意見を多数いただいた。いただいた意見を踏まえ、講座の内容や周知方法など更なるねりま防災カレッジ事業の充実に努めてまいりたい。本日は、長時間に渡ってご議論いただきありがとうございました。